

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：30122

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2010 ~ 2012

課題番号：22592512

研究課題名（和文）身近な人と死別した子どもへのグリーフケアとその評価

研究課題名（英文）Exploring Ways of Grief Support for Children Dealing with Death of a Important Person for Children

研究代表者

荃津 智子 (KUKITSU TOMOKO)

天使大学・看護栄養学部・教授

研究者番号：10177975

研究成果の概要（和文）：

死別した子どもを持つ親の語りの分析では、子どもは死別した人との新たな関係を構築するプロセスとして家庭内の仏壇の存在や墓参りなどが、わが国においては重要な役割を担っていることが示唆された。一方で看護職への調査では普段から子どもに関わる現場の看護職か否かに関わらず、家族と死別する子どもへの関わりに戸惑いや難しさを感じており、子どもの死の理解や子どもと死の問題を語ることを考える機会がないことが背景にあった。また、小中学校教員への子どものグリーフに関する研修会への参加者が少なさから、子どものグリーフに関して理解や関心が十分でない実態がみえてきた。以上から子どもと死の問題に関する学習会や事例検討を積極的に展開する必要があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

Voices collected in focus groups revealed that even though parents had initiated the conversation, many were not sure if their children fully understood what they tried to teach them on the subject of death. At the same time, many parents observed that their children's behavior included offering food or water, talking about the interests of the deceased, and decorating flowers at the altar placed at home, which indicate their connection with the deceased. Likewise, this shows that despite the concerns of parents regarding their children's ability to understand the concept of death, children will learn in their own way, particularly through observation of death and mourning rituals.

When exploring how nurses responded to bereaved children, it was revealed that nurses believed in the importance of "death-related" conversation with the bereaved children. However, 75% of them felt that such conversation was difficult to initiate. They tended to avoid interaction with the bereaved children, mainly because of their lack of confidence and deficient knowledge of cognitive development regarding children's understanding of death

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,790,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,870,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：子ども、死別、喪失、グリーフケア、死の理解

## 1. 研究開始当初の背景

欧米においては子どもの死別による悲嘆、喪失体験については研究が進み、子どもの死別体験が、適切な支援を受けないまま放置されると子どもに心理的苦痛を引き起こすことになることが指摘されている。それらを踏まえ子どもへの支援の取り組みが進んでいる。

わが国では、死別した子どもの悲嘆、喪失に関して、小島（2004）、峰島（2008）は、学童期から思春期に死別体験のある大学生へのインタビューを行い、その当時感じたこと、考えたことなどを明らかにしている。また、親などと死別した子どもへの関わりの事例から子どもへのサポートのあり方を検討し、報告したのものもある（大塚：2002、伊藤：2004、武田：2005、廣岡 2008）。

しかし、死別体験のある子どもやそれを取り巻く家族の意識、さらに支援方略へと系統立てた研究は十分に行われていないのが現状である。子どもにとっては、身近で重要な人との死別は危機的出来事であり、適切なサポートが必要であることは欧米の研究でも明らかである。子どもが死別を経験するときの家族のあり方は、子どものグリーフケアにおいて非常に大事である。そこで、わが国における大人と子どもの「死」の問題への向き合い方の特徴も踏まえた支援を検討していくことが重要である。

しかし、著者らの研究でもわが国では親自身もこれらの問題を子どもとどのように話してよいかの戸惑い、時にはごまかす、子どもには話す必要がないなど子どもと「死」について語ることが、未だ一般的とはいえない状況がある。また「生・死」に対する考え、「悲しみ、悲嘆」の反応・表現、「喪」への認識、儀式などは、社会的・文化的価値や伝統的考え、信念などに影響を受けることも予測され、わが国における子どもと家族のためのグリーフケアのあり方を検討することは重要課題の一つといえる。

そこで、これまでの著者らの研究成果をさらに発展させ、死別体験を持つ子どもの思いやグリーフケアの実態を明らかにし、子どもとその家族を含めた包括的な支援とその評価を行うことの学術的意義は大きいと考えた。

## 2. 研究の目的

わが国の社会や文化を考慮した死別体験を持つ子どもへの支援のあり方としてその家族を含めた包括的なグリーフケアの検討及びその評価を行うことを目的とする。

(1) 子どもにとって身近な重要他者を亡くした子どもの悲嘆、喪失体験、そのときの周囲の関わりの様子など子どもへのグリーフケアの実態を明らかにする。

(2) 死別体験のある子どもへのグリーフケアおよびその評価の実施。

## 3. 研究の方法

当初の計画では、研究協力病院など協力を得て、死別する子どもたちへのサポート介入をしながら、子どもたちや家族の状況を検討分析する予定であった。しかし、協力施設の確保等から病院においての子どもを残して亡くなる子育て世代への介入研究に限界があった。そこで、

### (1) 看護職らへの死別体験をする子どもへの関わりの実態に関して

現場でケアする立場にある看護職らを対象に、子どもの死別、喪失、グリーフケアに関して質問紙法による調査。

対象者は、「子どもと死の理解」に関する学習会に参加した看護職、保育士。子どもへの死別に伴うサポートにどう関わっているのかを質問紙法によりデータ収集を行い検討した。自由記述内容は、記述内容を質的分析方法により整理検討した。

### (2) わが国における死別後の子どものグリーフワークの特徴

死別体験のある子どもを持つ親 19 名を対象に質的帰納的方法による語りの分析（データは、前回までの研究課題により収集されたもの）。対象者には、グループインタビューによる半構成的面接の実施によるデータ収集が行われた。

分析は、面接内容を、さらに死別後の子どもが亡くなった方への反応や日常行動の様子から亡くなった方との関係のあり方の観点から内容を分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 看護職への死別体験をする子どもへの関わりの実態に関して

2 か所の病院で働く看護師、保育士、MSW を対象に「子どもの死の理解や大切な人と死別しなければならない子どもへのケア」に関する学習会を実施し、参加者 28 名を対象に質問紙により看護職が日頃の死別する子どもたちへの喪失、死別への関わり、考えの実態を把握した。

参加者 28 名の内訳は、看護師 25 名（成人系病棟勤務看護師 12 名、小児病棟勤務看護師 13 名）、MSW 2 名、保育士 1 名であった。質問紙の集計結果については、対象者の普段から子どもと関わる立場か、また死別する子どものケアの経験の有無など結果の詳細は表 1、表 2 に示した。参加者の中で身近な人と死別した子どもに関わった経験のある者

は 16 名 (57.1%) であり、その時の関わり  
に難しさ、戸惑いを感じている者 12 名 (75%)  
であった。

表 1. 死別する子どもに関わった経験  
N=28 (無回答 2)

	経験あり	経験なし	計
小児病棟 勤務看護師	6 (21.4%)	4 (14.2%)	10 (35.7%)
成人系 勤務看護師	10 (35.7%)	3 (10.7%)	13 (46.4%)
その他 MSW、保育士	0	3 (10.7%)	3 (10.7%)
計	16 (57.1%)	10 (35.6%)	26

表 2. 子どもとの関わりの難しさ・戸惑いの有無  
N=16 (無回答 1)

	難しさ・戸惑い あり	難しさ・戸惑い なし
小児病棟 勤務看護師	6 (37.5%)	0
成人系 勤務看護師	6 (37.5%)	3 (18.7%)
計	12 (75%)	3 (18.7%)

関わった子どもの年齢は、幼児期から学童  
期とさまざまであり、関わりに難しさや戸惑  
いを感じた場面は、母親や父親の死が近いこ  
とを子どもに隠していた場面、親やきょうだ  
いが亡くなった場面などであった。

子どもとの関わりの難しさ、戸惑いの内容  
は、「子どものへの声かけ、接し方」に関す  
るものが主で、その結果実際の子どもと関わ  
る場面では「話題に触れないようにした」、  
伝えたいことも「伝えられずに終わる」とい  
う状況であった。これらの理由は、「子ども  
が死をどう理解するのか分からない」「子  
どもに話すことに自信がない」などであった。

以上、子どもが死別を体験する現場の看護  
職らは、話す必要があると感じながらも子  
どもと死について話すことに構えがあり、何  
をどのように話してよいかわからない、子  
どもと話すことを避けがちになるというこ  
とが明らかになった。この背景には、子ども  
の死の理解や子どもに死を話すことへの抵抗  
や戸惑いがあると言える。

また、「子どもの死の理解」に関する学習  
会の内容に関しては、「子どもの発達と認知  
の特徴」「子どもの死の理解」「子どもの反  
応や表現の意味」「子どもを信ずること」「死  
の問題は子どもにとってもタブーでないこ  
と」に関することが学びとなっていた。特に  
「死の問題は子どもにとってもタブーでない

いこと」については、「子どもだからこそ、  
はぐらかしてはいけないということにはつ  
とさせられた」など子どもと死の問題に関し  
ては、医療現場の看護職らでも抵抗があるこ  
とがあらためて明らかとなった。

さらに、学習会を経て今後子どもとの関  
わりに関する思いは、「子どもに隠さずに伝え  
る」「子どもとまっすぐ向き合う」「子ども  
の力を信じる」等を意識したいとの記述がみ  
られた。

以上から子どもの認知の特徴や死の理解  
に関する学習の場は、子どもの理解を深める  
ことにつながり、子どもを理解し、関わる上  
での参考になっていることが明らかになっ  
た。また、これまで子どもと死の問題を考  
える機会がないこと、また、子どもだからと  
特別視していたこと、子どもであっても同じ  
目線で考えてよいこと、子どもと向き合うこ  
とを避けてはいけないこと、子どもにとつ  
ても別れのプロセスを大事にすること、子  
どもの持っている力を信じることを考える機  
会になっていた。

これらの結果は、普段から子どもと関  
わる機会の多い小児看護を実践しているか、  
いかに関わらず、同様の状況であった。しか  
し、特に成人系で働く看護職らは、家族の一  
員としての子どもの存在を認めながらも、子  
どもへの関わりについては躊躇するが故に  
後回しになりがちであった。以上から子ども  
の発達段階と死の理解や子どもの認知や反  
応の特徴等について学習する機会をもつ、家  
族としての子どもの問題に関する事例検討  
を行う等を積極的に展開する必要性、重要  
性が示唆された。

## (2) わが国における死別後の子どものグリー フワークの特徴

6~12 歳の死別体験のある子どもを持つ親  
を対象に、親からみた死別後の子どもと亡  
くなった人との関係に関する様子を分析した。  
その結果、子どもは亡くなった人との新たな  
関係を構築していくプロセスにおいて家庭  
内の仏壇の存在や墓参り等で家族とともに  
過ごすという行為が、わが国においては重  
要な役割を担っていることが考えられた。死  
別体験後の子どもの様子として、子どもは  
親の姿を模倣する形で仏壇にお菓子を供  
える、花を飾る、仏壇に手を合わせる、  
また学校から帰宅後には仏壇を前に亡  
くなった人に語りかけている姿、その他  
にはお盆など死者が戻ってくると言  
われる風習時の振る舞いについて親は  
語っていた。これらについては、親  
自身は「子どもにそうすることを教  
えたわけではない」「いただきもの  
があるときなど自分で仏壇に持  
っていく」「子どもなりに亡  
くなった人を大事にしているのだ  
と感じた」などが語られていた。

これらの語りは、親がそうすることを教えたというよりは、親の日々の姿を通して、子どもなりに亡くなった人の存在を仏壇や墓参りという場や状況を通して、子どもなりに死者との新たな関係を構築していく姿といえる。

これらの行為は日本の家庭内の仏壇の存在、墓参り、お盆には死者が一時家に戻ってくるなど考えや風習が、子どもにとっては亡くなった人とともに過ごす時や場を死後も確保することにつながっているといえる。さらには大人のふるまいを通して、悲しみを癒していくプロセスとして亡くなった人との新たな関係構築の機会になっていると考えられる。これらは、家庭内に仏壇があるとうわが国の特徴のひとつといえる。

わが国では家庭における仏壇の存在が亡くなった方と遺族をつなぐ役割をもち、それが死別にとまなうグリーフワークの助けになっているといえる。子どもは家族が仏壇に向かう姿などに接することで、言語的、非言語的コミュニケーションという形で亡くなった方との死別後の新たな関係の持ち方を学ぶと同時にグリーフワークの助けになっている側面でもあると考えられる。

以上から子どもにとっての死別のグリーフワークとして、子どもと家族が、共に一緒にお参りする、儀式に参加する等の機会は子どもにとっても重要な意味がある。

### (3)その他

#### ①学習会の企画・実施

「子どもの死の理解、子どもの発達段階による反応や対応」に関する学習会を看護職等の医療職を対象に3回実施した。2回については、研究活動の一環として研究者が企画し2か所の病院に声をかけ病院において実施した。この時の看護職の反応として前述した。3回目は、先に実施した内容を受講した方が看護職にとって子どもの死別時への対応として重要なことであると考え、企画したものに研究者が講師として協力した。子どもの死の理解、子どもの対応の重要性については、現場の方々に関心を持って認識され始めている。

#### ②小中学校の教員を対象とした「子どものグリーフケアを考える会」の企画・実施

子どもが日常多くの時間を過ごす学校現場の方とも子どものグリーフケアの問題を検討していくことが重要と考えた。そこで地域の小中学校の教員、養護教員を対象に300校程に「子どものグリーフケアを考える会」(2012年11月実施)の案内を出したが、5名の参加者にとどまった。

参加者は、子どもの死の理解に関すること等についてあらためて考える機会になった

など評価が高かった。しかし、参加者の低さは、子どもが多く時間を過ごす学校関係者には、子どもの喪失、グリーフケア等への関心があまり高くないことが予測された。

子どものグリーフケアの問題は、家族、医療職から、さらに子どもが日常的に多くの時間を過ごす学校現場も含め理解を進めることで、子どもを取り巻く環境として子どもへの支援を包括的に検討する必要がある。次年度以降の継続的な研究課題となる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 荃津智子, 身近な人と死別する子どもへのグリーフケアの構築に向けて, ベストナース, 5月号, 2011, 55-57. 査読無
- ② 荃津智子, 井上由紀子, 岩本喜久子, 小林千代, 工藤悦子, 子どもの親・同胞との死別による喪失体験と支援のあり方, 科学研究費補助金基盤C研究成果報告書, 2011.

[学会発表] (計2件)

- ① Iwamoto Kikuko, Kukitsu Tomoko, Etsuko Kudo, Exploring How Death is Discussed with Children in Japan, 9<sup>th</sup> International Conference on Grief and Bereavement in Contemporary Society, ADEC 33<sup>rd</sup> Annual Conference, 2011.6. Miami, USA.
- ② 荃津智子, 工藤悦子, 岩本喜久子, 井上由紀子, 大切な人と死別する子どもへの関わりに対する看護職の意識, 第17回臨床死生学会, 2011.9. 神戸

[図書] (計2件)

- ① 岡田洋子, 荃津智子, 井上由紀子, 草薙美穂, 小児看護学1, 医歯薬出版, 2010, 1-212.
- ② 高橋聡美編著, 瀬藤乃里子, 米虫圭子, 荃津智子他, グリーフケア, 2012, 1-264.

[その他]

ホームページ

子どものグリーフケア

<http://tenshi-children.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

荃津 智子 (KUKITSU TOMOKO)  
天使大学・看護栄養学部・教授  
研究者番号：10177975

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

井上 由紀子 (INOUE YUKIKO)  
北海道文教大学・人間科学部・教授  
研究者番号：00320557

岩本 喜久子 (IWAMOTO KIKUKO)  
札幌医科大学・緩和医療学講座・特任講師  
研究者番号：30513692

### (4) 研究協力者

田中さおり (TANAKA SAORI)  
天使大学・看護栄養学部・助教  
研究者番号：00559825